

曲 目 解 説

■セレナード第13番ト長調K.525 「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」

セレナードとは「夕べの音楽」のことであり、日の暮れた頃、親しい人々が寄り集まって奏する愛情に満ちた楽しい音楽をいう。このかぎりでは、声楽であっても器楽であってもかまわない。モーツアルトの時代にはこのセレナードの様式が広く流行した。

彼はセレナードを13曲も書いている。それらはいずれも多楽章から成る器楽曲である。この曲はそれらの中でも最後の作品にあたり、最も通俗的に知られている名曲である。1887年8月10日、モーツアルト31歳のときウィーンで作曲されたもので、編成は弦楽四部（チェロ・バスは一緒）となっている。モーツアルト自身のカタログに“Eine kleine Nachtmusik”（小さな夜曲）と書かれている為に、この愛称の方が有名になり、この名で呼ばれることが多い。（通例略されて「アイネク」と呼ばれている。）そしてそのカタログには、アレグロの第1楽章とロマンツェの間にもう一曲のメヌエットがあって、全曲は五楽章からなるものであったが、はじめのメヌエットは、初版当時からなく、他の多くの器楽曲や交響曲同様、四楽章形式に落ちついている。セレナードとしてメヌエットが一つしかないのは他に類がないので、モーツアルトが抜きとったという可能性は少ないが、あるいはメヌエットが一つしかないので「クライネ」の語を付したとも考えられる。

- 第1楽章 アレグロ ト長調 $\frac{3}{4}$ 拍子 ソナタ形式
- 第2楽章 ロマンツェ・アンダンテ ハ長調 $\frac{3}{8}$ 拍子 複合三部形式
- 第3楽章 メヌエット・アレグレット ト長調 $\frac{3}{4}$ 拍子、トリオ ニ長調
- 第4楽章 ロンド・アレグロ ト長調 $\frac{3}{8}$ 拍子 ロンド形式

■ヴァイオリン協奏曲第3番ト長調K.216

モーツアルトは、「アデライデ」と呼ばれる少年時代の作品を含めると、ヴァイオリン協奏曲を8曲書いたと言われている。しかし「アデライデ」と第6番・第7番は彼自身の手になる草稿が失われている為、彼の作品であるか、真疑が問題になっている。

第1番～第5番の5曲は1775年モーツアルト19歳の4月から12月にかけて、故郷ザルツブルグで作曲された。その為、「ザルツブルク協奏曲」とも呼ばれている。ザルツブルク協奏曲の中でも第3番～第5番が特に有名で、内容も充実しており、現在でも、演奏会場でしばしばとりあげられる。いずれも明快で美しく、若さにあふれた作品である。

第3番の完成は9月で、前作第2番ニ長調K.211から、わずか3ヶ月の後である。全体的構成の面では、前2作とさほど変わりはないが、規模の大きさ、技法の確かさなど様々な点から、わずか3ヶ月という短い期間に飛躍的な発展がみられる。中でも、この曲でモーツアルト独自のスタイルが強くうちだされたことがあげられる。たとえば独奏楽器とオーケストラとの対話的な性格、管楽器の重用などにこういった点のはっきりと現われている。

- 第1楽章 アレグロ ト長調 $\frac{4}{4}$ 拍子 協奏風ソナタ形式
- 第2楽章 アダージョ ニ長調 $\frac{4}{4}$ 拍子 ソナタ形式
- 第3楽章 ロンドー アレグロ ト長調 $\frac{3}{8}$ 拍子 中間部 アンダンテ ト短調ーアレグレット ト長調

■交響曲第29番イ長調K.201

1773年から74年にかけて、モーツアルトが、ザルツブルグで作曲した9曲の交響曲のひとつであり、その中では最も成熟した作品である。やはりその9つの交響曲のひとつであるト短調K.183とこのイ長調の両曲が高く評価されるようになったのは最近のことである。

そのト短調交響曲が、後期の40番を予感させる全く独自の信仰告白の趣を呈しているのに対して、このイ長調の交響曲は個人的なものを超えた基調音が鳴っている。

この曲では、モーツアルトがイタリア旅行で得た音の作り方とドイツ的な対位法の技法が見事に結びついている。この交響曲の自筆譜は、訂正のあともなく、さらさらと書きおろされていて、モーツアルトがこの曲の構想について抱いていた確信のほどがうかがい知れる。

- 第1楽章 アレグロ・モデラート イ長調 $\frac{3}{8}$ 拍子 ソナタ形式
- 第2楽章 アンダンテ ニ長調 $\frac{3}{4}$ 拍子 ソナタ形式
- 第3楽章 メヌエット イ長調 $\frac{3}{4}$ 拍子、トリオ ホ長調
- 第4楽章 アレグロ・コン・スピリート イ長調 $\frac{3}{8}$ 拍子 ソナタ形式